

近世の京都円山における景観デザインに関する研究

京都大学大学院 学生員 ○出村嘉史

京都大学大学院 正会員 川崎雅史

京都大学大学院 正会員 田中尚人

1 研究の背景と目的

京都円山では、古くから名所として人々が愉しみ集う場が存在してきた。現代でも園内で料理屋が経営されたり、四季折々の愉しみを提供し、全国でも有数の人々の生活に根付いた公園であるといえる。

本研究は、近世の京都円山における公共空間の存在形態やつくられ方を、絵図などの歴史的資料をもとに分析し、ここにおける空間づくりの理念を明らかにする事を目的とする。

2 円山界限

現在の円山公園は、もともと安養寺、長楽寺、双林寺、祇園社の所有していた場所にあり、この地の長い歴史の上に出来ている。この周辺一帯は古くから寺社仏閣の多く建てられた地域である（図1）。

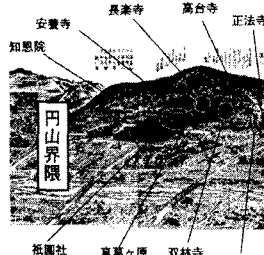


図1 円山界限（筆者作成）

この円山界限では、江戸期に愉しみ（たのしみ）の共有空間性が顕著になった。愉しみの共有空間性とは、対象となる空間の、人にその場を享受させる資質をいうものとする。

3 山辺のポテンシャル

円山界限は、東の洛外に連なる東山の中に位置し、山辺としての地形に特色がある。

この山辺上部においては、諸寺が各塔頭において、それぞれ江戸初期の文化人の手により、庭園林景がつけられた。その空間構成を次にまとめる。

- ・地形に対する建築の収まり：懸壁をたてて土台を造ったり、斜面に対して張り出した懸造（かけづくり）の建築を用いることによって建築が斜面上に上手に収まっている（図2）。

- ・視点場の多様性と視線の多方向性：道廻しや築山

によって様々な視点場をつくり、目を楽しませるものになっている（図3）。

- ・周囲とのつながり：隣接する各塔頭は、境界を曖昧にして互いに断絶せず、協調している。

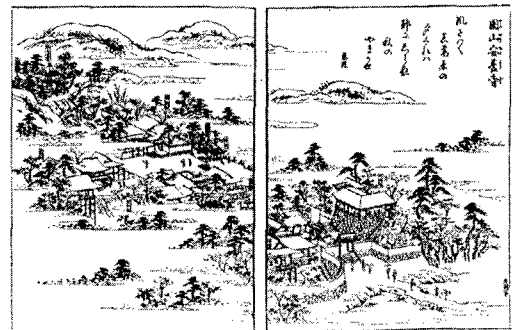


図2 安養寺境内（「都名所図会」より）

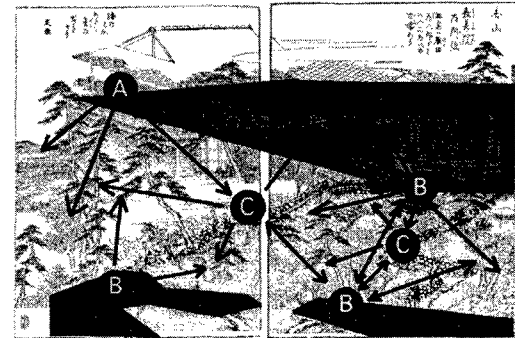


図3 左阿弥の視点場（筆者作成）

山辺下部は、祇園社を中心として展開される。かつて山辺に広がる広大な敷地であった祇園社は、大勢の人々を抱き込むだけの容量があり、東山の存在感と、その麓で大きく囲う事により、そこに集まる人々に一体感を与え、自由な活動を可能にしていたと思われる。

山辺上部と山辺下部の関係においては、双方向の視線で楽しめる、見る・見られるの関係が成立していた（図4）。

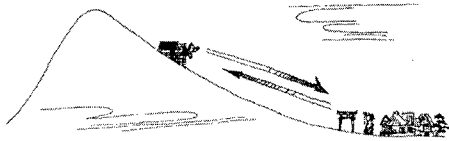


図4 見る・見られるの関係（筆者作成）

山辺という地形は、本来視界の多様性があり、空間的な面白さを備えているが、そこに上記のような様々な空間デザインを巡らすことで、高い「愉しみの共有空間性」の基盤となったのである。

4 愉しみの場づくりとその装置

江戸中期よりこの界隈の寺々は、明和（1764-1772）の頃から、それぞれ塔頭のレンタルスペース（席貸：せきがし）を始めた。席貸という形態が、山辺のポテンシャルを引き出し、人々に愉しみを与え、共有空間性を高めた。席貸には次のような内容が含まれていたことが諸絵図から読み取れる。

- ・文化的会合：席貸の利用として、文化的会合が盛んであった。菊会、立花・生花会、素謡会、書画展などが行われ、「東山新書画展観」という洛中の町人と画家との交流を図る画期的な催しもあった。
- ・宴席とやまねこ：宴席は席貸の中でも主要な形態

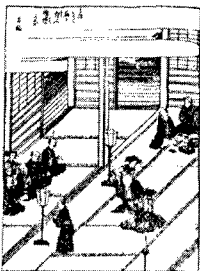


図5 也阿弥の宴席
（「都林泉名勝図会」より）

であったと思われ、この「場」を盛り上げ、愉しみの共有空間性を高めていた。円山界隈の宴席において特徴的だった事は、宴席の場に「やまねこ」と呼ばれた芸妓が出入りしていた事である（図5）。この芸妓達は、近接する下河原という地から出稼専門で通い、芸妓

の中でも格式が高く、起源は太閤の北政所の養成したものであった。

いずれも、東山の山辺を覆うこの一帯に於いて、人が集まり互いに楽しみあい、席貸による共有空間をつくり出していたと評価できる。

円山界隈の山辺下部の祇園社周辺でも、ポテンシャルの高いオープンスペースに仮設的な様々な装置を付け加え、愉しみの共有空間性を得ていた。図6は祇園社北林で夜桜に人々が集い遊ぶ様子である。ここでは桜の植樹、掛茶屋（露店）などの装置が、人々の愉しみを盛り上げる触媒であったと言える。



図6 祇園林夜桜（「花洛名勝図会」より）

境内の中には更に沢山の人が集っていて一つの遊興空間が広がっていた（図7）。江戸末期になって愉しみの場を培う上で、「絵馬堂」、「神楽殿」、「茶屋」などの装置が登場している。

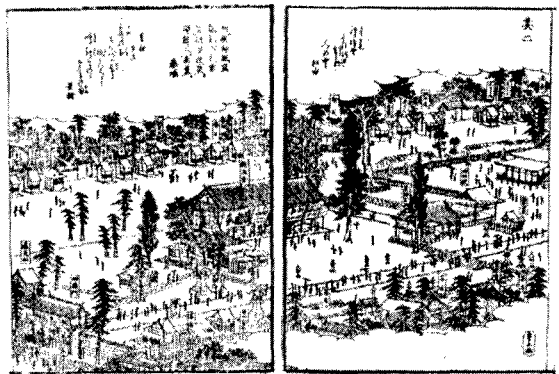


図7 祇園社境内（「花洛名勝図会」より）

5 結論と今後の課題

以上より明らかにした、愉しみの共有空間は、地理・地形的な空間基盤（山辺のポテンシャル）がまず整えられており、愉しみの触媒としての仮設的な装置を用いて、人々の活動・行為による愉しみの場づくりが行われ、その場所の価値の増すような工夫をした利用がなされていた。このポテンシャル、装置、行為が三位一体となり、愉しみの共有空間が出来上がっていたといえる。

現在の円山公園にも、この理念は多分に生かされており、そのデザインの特長性を指摘する事ができるが、これについて更に分析を深め、今後の公共空間づくりに生かす事はこれからの課題である。

主要参考文献

京都市編：京都の歴史 第6巻、1973.3

田中緑紅：円山公園、1960.5